

—MRAと私—

出逢いに

No.4



国際MRA 日本協会

出逢いに

No.4

目 次

MRA精神で貫いた国鉄生活	瀧山 養…… 1 P
自分の殻を破って	高橋千恵…… 8 P
声なき民のために	五十嵐 勉……16 P
子供たちの結婚と民族の伝統の 板挟みの中で	蔡 麗貞……22 P
私たちの世代が伝えなければな らないこと	宮崎美江子……29 P
あなたは「自由」ということを知 っていますか？	加藤シヅエ……33 P

「出逢い」バックナンバーのご案内

人は様々な形でMRAと出逢い、その体験も各人各様です。決して一つの決まったモデルがあるわけではありません。その様々な出逢いと体験を集めたMRA実践記「出逢い……MRAと私」No.2とNo.3のご一読をお薦めします。MRAを自らの生活の中で実践することによって生じた具体的な変化や意識改革の体験が語られています。抽象論ではない活きたMRA実践記としてごく自然にMRAを理解していただけることと思います。ご家族、ご友人にもぜひお薦め下さい。ご注文はMRA事務局（電話03-3821-3737）へどうぞ。各一部300円でお頒けしております。

人間は、無私の心境になる時、勇気が出るものである。太平洋戦争末期、家族を秋田の山村に疎開させていたところ、九州の鳥栖管理部長に発令された。鳥栖は鉄道輸送の拠点である。八千人余りの職員の半数は、女子挺身隊と男子の学徒であった。義勇戦闘隊という名称で輸送戦線を死守したのである。終戦まで二カ月の間に、職員六十名が職場や都市の空襲で命を捧げた。私はこの尊い犠牲を無にしてはなら



MRA精神で貫いた 国鉄生活

瀧山 養
たきやま まる

ないと心に誓ったのであった。

戦争は終わったが汽車は止まらなかった。博多周辺に米軍の基地が設けられ、軍事輸送と外地からの引き揚げ、韓国人の送還が重なり、荒廃した施設と資材の窮乏に泣かされた。事故が頻発し、その都度占領軍司令官から対策を迫られた。私は毎日のように現場を訪ね、できる限りの手を打った。問題の多い職場では早朝の点呼に立ち会ったり、寮にも泊まって、直接職員に心情を吐露した。当局への不信を煽る共産党との闘いでもあった。人間の誠意は通じ、不注意による事故は激減した。管内の職員に別れを惜しまれつつ、後ろ髪をひかれる思いで二年七カ月の職責を果たした。

昭和三十年、労働紛争が最もこじれた広島管理局長を拝命した。この時、M R A運動に熱心な監察局長の片岡義信さんに呼ばれて、「広島局には憎しみが溢れている。君は君の人間性を生かしてやりなさい」という温かい激励の言葉を戴いた。私は就任の挨拶として誠意と愛情で臨むことを宣言した。

着任早々、隣局で紫雲丸事故が発生して、管内の小学校の修学旅行の先生と生徒

が二十四名亡くなった。私は全局を挙げて応援と弔問に当たり、遺族から深く感謝され、事後処理も円満に片付いた。参加した多くの職員は、国鉄の威信回復のために真剣に働いてくれ、局内の空気は明るくなった。しかし、国鉄の労働運動は年毎に激化し、闘争毎にピケ隊が業務を妨害し、鉄道公安官の手に負えなくなり、警察が出るという戦術に警察が出勤を渋るという始末だった。この時、広島県警の本部長に就任したのは、M R A に熱心な木村行蔵さんだった。木村さんは話を聴いて警察の態度を改め、協力してピケの対処に成功した。

前局長の時に処罰され休職となった二十七名の組合員がオルグとして職場にはりつき、職制が麻痺して、そのため運転事故が発生した。国鉄には、一定期間無事故を続けると現場を表彰する規程があり、運転事故防止運動を進めていた。表彰間際に事故を起こした職員が、自責の念にかられ自殺するという事例を盾に、組合から運転事故防止運動反対の申し入れがあった。表彰制度の規程の内容は変えられても、運転事故防止の運動は止める訳にはゆかない。

管内の湯田温泉に、重症を負った職員のリハビリの療養所があった。訪ねると二十七名の寮生が野球を楽しんでいる。片手の無い野手、両足切断の捕手といった障害を負った職員ばかりである。私は目頭が熱くなり、職員の不幸を防ぐために障害

事故防止に力を入れ、現場の規律を正し、併せて運転事故の防止にあたることを思いついた。

現場を廻ると支障物があつたり、足場が悪かつたり、作業環境が改善されていないことが目についた。直ちに職員の障害事故防止のための予算を重点に配布し、障害事故防止運動を展開した。その効果はつきめんに現われ、療養所の患者は在勤二年間に七人に減少し、野球はできなくなったという報告を受けた。何よりも現場の秩序が回復し、運転事故も少なくなった。

これに反発して、革同（急進派）勢力の強い宇部地区で、分会単独で定員要求を突き付け、急行列車を故意に止めるという事件が起きた。着任以来組合本部とは話し合いを行い、争いを避ける方針で臨んできたので、これは明らかに山猫争議である。私は重大な決断を迫られた。現場長からは、広島局建て直しのチャンスだから、結束して局長を支持するので断固対決してくれという陳情があつた。組合の地方本部は分会と対立していて、委員長は外遊中でその留守を狙った節があつた。私は筋を通して拒否したところ、三つの駅で職場放棄が始まり宇部地帯の貨車の出入りが止まった。職場復帰の業務命令を出したが応じないので、処分を段階的に強め遂に

十四名を^{かぐしゅ}減首するというところまで進んで、組合は動揺した。その間一週間にわたり、山陽本線の貨物列車が運休するという国鉄始まって以来の事件となった。本社副総裁から事態收拾の厳命が下り、組合本部の革同の巨頭と二晩徹夜の交渉の結果、減首者の数を半減することで妥協した。わたしはこの種争議の根本的解決策として、国鉄が迷惑をかけた地元の工場に損害を弁償し、組合を賠償で訴える案を進めたが、本社総裁から勝訴する自信がないと断られ、宇部興産に謝りに行ったところ、中安副社長から「今回の広島鉄道管理局の措置は必ず将来に好結果をもたらすと信じ快諾する」と言われ感激した。後日、十河総裁に顛末を報告したら、副総裁のごとき

に言われたからといって、なぜ所信を貫かなかったのかとお叱りを受けた。

広島在勤二カ年は二度も台風に見舞われ、植樹祭の行幸やブルートレインの実現などに組合との闘争も重なり、地元とのお付き合いもあり多事他端な毎日であった。この間、判断や行動に誤りが無かったのは、毎月木村さんの主催で行われたMRAのミーティングに参加していたお陰であった。

本社に戻り、十河総裁のブレンとして審議室長を務めることになった。昭和三十三年の春闘は旅客列車を大幅に止めるという未曾有の闘争となった。当局は組合

幹部十八名を解雇したが、組合は役職にとどまって反発した。その時、MRA劇「明日への道」が上演され、十河総裁と小柳委員長が同席することになった。地主と小作人がチェンジすることで和解できたという筋のもので、二人は深く感動し、固く握手し、これでいこうということで、当局は政府をして調停、仲裁を尊重させ、組合は役職から身を退いて公労法の精神が初めて貫かれたのであった。私は麻布のMRAハウスに通って、洪沢雅英さんの指導を受けた。

十河総裁は政治家の介入を嫌い、新幹線を執念をもって実現させた。私は裏方として赤字線の建設を中止して、技術者を新幹線に充当する仕事を担当させられた。総裁は自分が責任を負うから、誰が正しいかでなく、何が正しいかというMRAの標語通りやれと言われ、それを実行したが恐れは感じなかった。しかし十河総裁は政治家の恨みを買って、新幹線の開業を見ることなく退陣させられた。それ以降、国鉄は崩壊の道をたどることとなった。

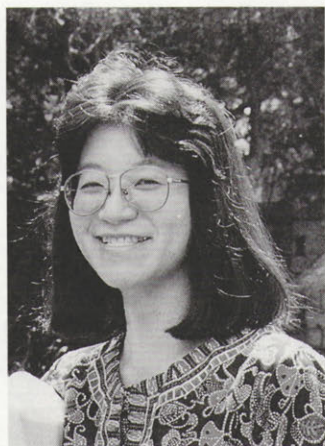
箱根、小田原のMRA国際会議には毎回出席し、スイス、コーの日米欧財界人コー田卓会議にも参加した。国家、民族、宗教、階級を超越して、人間の魂に触れる素晴らしさも体験できた。自分の担当した、安全の問題、海外技術協力の問題、い

ずれもMRA精神によって支えられた。

しかしわが国の現状は、経済大国となつて物質的には恵まれているが、精神的には荒廃している。十河総裁は亡くなるまで日本の将来を憂い、政治への不信と国鉄のことを心配しておられた。国鉄は政治家と官僚と労働組合の食い物となつて自壊してしまつた。行政改革は絶対的に必要であるが、何よりもモラルの立て直しが急務で、MRA精神が発揮されなければならない。

(交通安全問題研究家、元国鉄技師長 神奈川県川崎市在住)

大学の共通一次試験を三日後に控えた深夜、私はかつて経験したことがないようなパニックに陥っていました。「合格する自信がない、もう時間も残っていない、どうしよう……」。進学を当然のことと考えていただけに、合格できなかったら自分はどうなってしまうのか想像すらつきませんでした。不安と焦りに耐えかねて、二階の窓から積もった屋根の上へ出て泣き崩れました。



自分の殻を破って

高橋千恵
たかはし ちえ

私には、三つ年下の妹がいます。幼い頃から何でも器用にこなす子で、あらゆる点で私とは正反対でした。「お姉ちゃん、お姉ちゃん」と、どこまでも後をついてきた頃は無条件で可愛かったのですが、妹が学齢期に達してオール5を立て続けに取り、学年で一、二番の成績をあげ始めるに従って、私は心中穏やかならぬものを感じるようになり、時には妹を疎ましくさえ思うようになっていました。両親が近所の人や親戚と私たちの成績の話をしないかと恐れ、あからさまに二人を比較する大人を心から憎みました。

何か確固とした目的があつて大学進学を目指していたわけではありません。妹が将来入るだろうと思われる高校よりランクが下の高校を受けざるを得なかった私は、せめて大学は名のあるところに入つて、自分が人間として劣っていないことを証明したかったのです。当時の私は、学歴こそが人間の価値を計る唯一のものさしだと信じて疑わず、高望みとは分かつていても、最後まで志望校を変えようとはしませんでした。高校時代の楽しい思い出はなく、クラブや生徒会の活動も、友人との交際も、私には時間の無駄に思えました。当然友人もほとんどできませんでした。忙しい受験期とはいえ、十八才の正月には年賀状がたった三通しか来ず、「うちの娘に

は友達がない」と父親を嘆かせたものです。

そんな味気ない生活も大学に入るまでの辛抱と思って耐えてきたのですが、受験を目前にして、その願いは叶えられそうもないことが分かってきたのです。これまでの年月は何だったのか、楽しかるべき十代が空しく過ぎたように、このまま私の人生は失望と落胆の連続で終わるのではないかと考えるうちに、何のために生きているのか分からなくなり、胸が苦しくなってきました。

階下の部屋では、母がまだ起きていました。「母さん、気持が悪いの」。すでに虚勢を張ることすらかなわず、私はヘナヘナとその場に座り込んでしまいました。たとえ母に冷たくあしらわれても構わない、どうにでもなれ、そんな投げやりな気持ちでした。

「バカだね、この子は。そんなに思い詰めて……」。母の反応は意外にやさしいものでした。小さい頃から母は厳しい人だと思い込み、物心ついてからは出来のいい妹の方が可愛いのではないかとかんぐり、両親の愛を疑うことすらあった私でしたが、この瞬間に母が急に身近な存在に感じられました。

その夜は何年か振りに、母と並んでコタツで寝ました。「お前のイトコ二人がM R Aという団体の研修で海外に行っているけど、お世話になってみる気はないかい。

お前の学費のために用意していたお金を使ってもいいよ」。こう切り出したのは母の方でした。予想外の提案でしたが、母が世間体よりも私のことを案じてくれていることが嬉しかったのです。M R Aに関する知識は皆無でしたが、イトコたちがそこで生き甲斐を見出しらしいということは知っていました。

「私は受験で行き詰まってしまったけれど、外国の同年代の若者はどんなことに喜びを感じたり、悩んだりしているのだろう。日本では深刻に思えることも、世界では案外ささいな出来事なのかも知れない。次の数年間で、人生で本当にやりたいことを考えて見るのもいいかな」。そう考えると肩の力も抜け、今後の展開が楽しみにさえなってきました。

予想通り大学に落ちた私は、迷わず母の提案に従いました。どうしてあれだけこだわっていた進学をすっきりと諦めることができ、何も知らないM R Aに飛び込めたのか今でも不思議です。

上京して一年間、M R Aの事務局を手伝うかたわら、英語学校に通いM R Aの海

外研修に備えました。その頃、私の価値観を根底から覆すような一文に出会いました。それは、「God has a plan for everyone（神様は、全ての人に対して特別な計画を持つておられる）」というMRAの創始者フランク・ブックマン博士の言葉でした。それまでは神の存在を信じたことなどありませんでしたが、「もし神様がおられるのなら、私と妹の人生には違う計画をお持ちなのだ。自分と他人を比較して自ら疲れさせるのはよそう」と決心しました。

最初の行き先はインドでした。空港を一步出た途端、凄いところへ来てしまったと思いました。真夜中なのに大勢の子供たちが駆け寄ってきて、私の荷物を運んだり靴を磨こうとします。炎天下の路上では学校に行けない子供たちが、大声を張り上げて物を売っています。痩せ細った老人を見れば、長年の苦勞がしのばれ、路上で生活する子供を見れば、これから彼らを待ち受けている厳しい人生を思い心が痛みました。それまで私には、受験の失敗からくる敗北者の思いが依然くすぶっていました。日本の社会は私を必要としなかったという、心の傷が残っていたのです。しかし、そんなコンプレックスなど比較にならない程の重荷を背負って懸命に生きる人々を目の当たりにして、私の自己憐愍は吹き飛んでしまいました。「ここに目を

つづつてはならない現実がある。たとえ自分にできることは限られていても、何かしなければならぬ。僅かでも社会に貢献する生き方ができれば、それも価値ある人生と言えるかも知れない」。インドは私の目と心を広く世界に開かせてくれました。

海外に出て半年目に、私は妹に宛てて長い手紙を書き、嫉妬ゆえに一方的に心を閉ざして、妹の失敗を願ったことさえあったことを詫言しました。すると妹からすぐに返事がきました。妹は私たちの間に壁のようなものを感じていたが、なす術もなく淋しい思いをしていたことを告げ、また姉の私に対して時折感じていた優越感が私を傷つけ追い詰めてしまったなら申し訳なかつたと謝ってきました。妹はその返事に先立って国際電話をくれ、私に手紙の札を言ってくれました。電話するように勧めたのは両親でした。たった二人きりの娘たちが張り合っていることに親が心を痛めていたことを初めて知りました。両親は、私たちが以前のように仲の良い姉妹に戻ったことを大変喜んでくれました。また、M R Aに出会った翌年から、年賀状は勿論、各国の友人から私宛に届き出した手紙の束に、父も安心したようです。

人の才能や活躍を素直に認め、褒めることが出来るようになったのも、M R Aの

お陰です。かつての私なら、才能に恵まれた人に出会えば、嫉妬心か劣等感のいずれかに駆られる場合が多かったのですが、今は、スポーツや芸術の才能も優秀な頭脳も、全て神様からの贈り物であり、それらを活かして多くの人々に喜びをもたらすことの出来る人たちはなんて素晴らしいのだろうと、感動すら覚えます。私の妹は教員になりました。全く別の道を歩んでいる彼女から学ぶことは多く、しっかり者の妹を持てたことをとても誇らしく思っています。

私は現在、四年間の海外生活で習得した英語を使って、日本政府が開発途上国の科学者やエンジニアを対象に実施している技術研修の通訳をしたり、日本とアジア、太平洋諸国の理解を深めるための国際交流プログラムのコーディネーターをしています。MRAでの決意や経験が活かせていることを喜ばしく思うと同時に、神の見えざる手が少しずつ導いて下さったことに心から感謝しています。

MRAを通じて、志の高い真の友人を多く得ることが出来ました。また世界を身近に感じるようになり、「人事を尽くして天命を待つ」生き方や神様に愛されてここまでやってこれたという自信、貧富の差をなくすために尽くしたいという人生の目

標など、目に見えない、物でも計れない人生の宝を沢山頂きました。これからも大きな視野で、いかなる状況に置かれても自分の役割を求め続けていきたいと願っています。

(通訳 東京都渋谷区在住)

私は九一年まで東南アジアに六年住んでいたが、バンコクの知人にMRAを紹介され、帰国後、MRAに参加させていただいている。正直に言えば、これまでこうした理念の下に現実に活動している方々がいるとは思ってもみなかった。理想は文学や書物の世界の中にしか存在しないものであり、現実の苛酷な流れの前に常に画餅に帰すものであると考えていたが、MRAを知って、今はそれを恥じている。人



声なき民のために

五十嵐 勉
いがらし つとむ

間は理想に向かって努力を重ねていく「橋」としての存在であることを、改めて学び、喜びに与らせていただいている。実行することの困難と闘いつつ、この有り難い出逢いを大切にしていきたい。

そもそも私が東南アジアに六年以上も住むことになったのも、あるカメラマンとの出逢いがきっかけであった。

当時彼はタイ・カンボジア国境で取材活動を続けており、それを一冊の写真集にまとめて、新宿の書店で直販していた。折しもカンボジアでの虐殺の報道が流れ始めた頃であり、写真集を買いながらそのことについて質問したのが始まりだった。私も以前から戦争の写真集を集め、中国戦線や太平洋戦争の強烈なシーンを追いながら、人間を襲うものの残酷さを感じていた。

両親からも、戦争中のことをよく聞かされていた。特に母は、夜中までワラジを作りそのお金で母を学校へ行かせてくれた自分の兄のことをよく口にした。母の兄は徴兵され、中国戦線で戦死した。母は兄が既に戦死していたことも知らずに、千人針にキヤメルなどを一緒に包んでせつせと送り続けた。遺骨になって帰ってきた時の落胆ぶりを、深いため息をつきながら話してくれた。

そのカメラマンとは非常に気が合い、その後も会って話していくうちに、「タイ・カンボジア国境へ行ってみないか。自分の目で戦場に触れてみたら」ということになった。タイ・カンボジア国境は、難民が溢れ出し、国境を挟んでベトナム軍とゲリラ、タイ軍とが戦闘をしているところである。地雷や砲撃もあり、強盗も横行している。恐怖をも覚えたものの戦争の現実を見たい衝動が勝ち、八二年二月彼と一緒にカンボジア国境へと飛んだ。

約二週間の難民村滞在中に、ベトナム軍の砲弾が市場を直撃した事件に遭遇した。頭蓋骨が割れ、半身が炭になる、酸鼻を極める光景が私を打ちのめした。名前さえろくに分からずにただ焼かれて骨として捨てられていく彼らを見ながら、「もし彼らが口がきけたら、何か言いたいことがあるはずだ」と思った。自分が伝えるべきものの、書くべきものがここにあると思った。

国境以外でも、タイの農村の素朴さや大らかさ、新鮮な山岳民族の生活、黄色い袈裟をまとった小乗仏教の僧など、書く者にとってそれらが宝の山のように映り、カンボジア問題を軸に、長期に取材することを決心した。朝日新聞バンコク支局で長年助手をやっていた日本人の方に相談したところ、「うちに来なさい」と招いてく

れたので、絶好の機会と思い、日本で準備を整え、八四年、再びタイに渡り海外での生活が始まった。

その助手の方は、日本軍のマレー半島上陸の際情報活動をしていた人を父親に持つ、やはり戦争による数奇な人生を生き抜いてきた人である。タイで生活している間、日本軍が残っていた戦争の傷跡や、逆にアジアの地で無念の思いで死んでいった日本軍兵士のことなど、思いがけず様々な方面から絡みついてきて、カンボジアの現在の戦争と、日本の過去の戦争とが自分の中で重なり合っていた。

ベトナムやカンボジア、またビルマなどを訪れて感じたことは、その生活や現実が日本にほとんど伝わっていないことである。ニュースやクイズ番組で伝えられることはあっても、一対一の関係、人間対人間の関係としてはほとんど伝えられていない。日本は物においてはアジアにも膨大な流れを作り、大きな影響を与えているのに、精神的な流れはほとんど為されていない。余りにも偏っている。それがアジアとの関係を歪めている気がした。

タイの田舎で僧を経験した時、経もろくにあげられない外国人の私にうやうやしく合掌し、なけなしの中から食物を供してくれる人々の心に、自分も何かお返しを

したいと思った。自分に出来ることをしよう。出来ることは書くことしかない。書くことで、伝えることで、心のお返しをしようと思った。そう思い至った時、カンボジアのことも、日本の過去の戦争も、同じところに流れ込んでくるのを感じた。

そんなことで今、「東南アジア通信」(注一)という雑誌をさせていただいている。日本はこれだけ物質的技術には優れているのに、アジアをともに伝える雑誌一つないのは情けないと思う。日本の文化の責任を誰かが果たさなくてはならない。将来大きなところが本格的にやってくれるための、そのささやかな橋渡しになればというつもりで、何とか続けている。苦しい時、何かが私を励ましてくれる。その声に導かれるままに、続けていきたい。

(作家、編集者 東京都世田谷区在住)

(注一) 東南アジア通信

一九八七年六月にタイの首都バンコクで創刊された東南アジアの総合情報誌。等身大の生きた東南アジアの姿を政治、経済、文化、社会を通して総合的に伝える。季刊・B5判カラー・九〇ページ。これまでに十六号を発刊。号毎に様々なテーマで特集を設けている。

- 2号「水の生活」
- 3号「東北タイ」
- 4号「タイの学校」

- 5号「日本の戦争」
- 6号「山岳民族」
- 7号「タイ・カンボジア国境の十年」
- 8号「フィリピン／西洋の原罪」
- 9号「タイの仏教」
- 10号「新生インドシナの素顔」
- 11号「タイの華僑」
- 12号「内陸の国ラオス」

13号「知られざるビルマ边境」

14号「日本の戦争II」

15号「和平のカンボジア」

(2、3、5、6、11号は品切れ)

発行所 アジア文化社

〒一五八 東京都世田谷区奥沢七―十五―十三

TEL 03―5706―7847

FAX 03―5706―7848

定期購読 賛助会員 年会費五〇〇〇円 (2部)

普通会員 年会費三二〇〇円

私は台湾の新竹というところで、客家^{ハツカ}（注2）の家に生まれました。私を筆頭に女の子が八人も続けて生まれ、やっとその後男の子が二人生まれました。客家は女を跡継ぎにしないので、両親はどうしても男の子が欲しかったからです。客家の系統は十何種類あり、それぞれの言葉も八つの方言に大きく分かれます。祖母と母も系統が違い、普段はとても仲が良いのですが、こと言葉に関してだけは家の中でも



子どもたちの結婚と 民族の伝統の板挟みの中で

蔡 麗貞
さい れいてい

決して譲ろうとしませんでした。話す時、お互いに自分の客家語しか使わないのです。そのため家の者も、二つの客家語を使い分けながら二人と話したものです。なんと頑固なと思われるかも知れませんが、客家はこれほどまでに自分たちの伝統や文化を固く守り続ける民族なのです。現在母と一緒に暮らしている弟の奥さんも、やはり母とは違う客家語を話しますが、とても仲良くやっています。

客家以外の相手との結婚など考えたこともなかった私は、やはり客家である夫と結婚しました。その後、夫が留学することになり、一家四人でアメリカに渡りました。夫は卒業後もアメリカ各地の大学で教えました。

何も分からない、そして友人もない異国の地で、苦しい時や淋しい時、私の心の支えになったのは、地域のボランティア活動への参加でした。夫の大学の留学生のお世話を初め、病院や老人ホームでのアイロンかけや食事の手伝いなどに積極的に参加し、同時にアメリカ事情などを教わりました。次第に友人も増えて、私はボランティア活動の尊さや大切さを知り、将来もずっと続けようと決心しました。

主人が日本大学で教えることになり、一九八〇年に初めて来日しました。とにかく

く人の多いことと、家の狭いことには驚きましたし、言葉は何とか分かって、本で得た日本の知識と実際は随分と違うことも多く、大変な苦勞をしました。またどちらかが日本人なら問題はなかったのですが、二人とも外国人なので日本の習慣や風習に疎く、日本の習慣に慣れるまで何かと恥をかいだものでした。

同じマンシヨンに住んでいた日本人と結婚したスペイン人の女性からMRAを紹介されて、会合に参加するようになりました。彼女はMRAがどのような団体であるかということは特に説明しませんでした。彼女が「革命の道」というMRAの本を読んだ受けた印象は、MRAとはとても厳しい団体だなというもので、自分には絶対に到達することはできない教えだと思いました。でもMRAの人たちがとても優しく接してくれるので、日本に来たばかりで友人もまだいなかった私は、誘われればMRAの会合に参加するようになりました。

八六年に私たちは日本に帰化しました。理由は日本に永住しようと決めたからです。客家はどこに住んでも客家なので帰化することに抵抗はありませんでした。それに色々な土地に住んで色々な人と会々と国籍に対するこだわりは自然に消えてくるものです。ただし、自分たちが客家に帰属するという意識は片時も忘れることはありません。

八九年に娘は結婚することになったのですが、相手がユダヤ系米国人ということ
を聞かされ私は大変なショックを受けました。娘がまさか客家以外の人と結婚する
ことになるなどということは夢にも思っていなかったからです。この結婚を認める
ことは決してできないと何回も娘に言いました。

すると、「自分が結婚しようと考えている相手は青少年問題に取り組んでいる弁護
士で、ボランティアで陸上チームのコーチをしており、貧しい青年たちが陸上選手
として奨学金を貰って大学に行けるように自腹を切ってまで世話している立派な人
だ。もしこの人との結婚をそれでも許さないと言うのなら、お母さんの私に對する
これまでの教育は間違っていた」と娘は手紙に書いてきました。それでも結婚相手
は客家がいいと私が言うのと、「この広いニューヨークでどうやって客家を見つけるの
か、お母さんが自分で探してくれ」と娘に言われ、返す言葉がありませんでした。

私に流れている客家の血がどうしても許してくれないのです。私は何カ月も悩み
ました。そしてその時初めてMRAの静かな時間というものを本気で試してみよう
という気になりました。何回も何回も自分の本当の心の声を聞くとうとしているうち
に、確かに少しづつ心に変化が起きてくるのを感じました。再び娘が電話で許しを
求めてきた時、私は結婚を許しました。

八カ月後、娘たちはスペインで結婚式を挙げ、私たちもスペインへ飛びました。しかし、確かに娘の幸せを考えて結婚は許したのですが、心のどこかに許しきれない部分も残っていたのでした。

せめて息子だけは客家とは言わずとも、せめて東洋人と結婚してほしいと祈っていたのですが、娘からの電話で、息子が白人と結婚するかもしれないと聞かされ、再び強いショックを受けました。私は以前息子に、「もしお前が白人と結婚するならば心臓マヒで死んでしまう」と言ったことがあるので、直接言いくかつたのでしょう。幸いにも娘の時よりも早く立ち直れたのですが、息子の結婚式では、嬉しいのか悲しいのか分からないままずっと泣きつ放しでした。

子どもたちを外国人と結婚させてしまつては先祖に申し訳ないと考えていた私が、静かな時間を持ち心の声を聞き、当人たちの気持、そして幸せを何よりも大切にしなければならぬと考えを変えられたのだから、これで自分は完全にチェンジしたと思つていたのですが、息子から孫ができるという連絡を受けた時、嬉しいという気持になるどころか、まるで心臓が口から飛び出してしまふようなショックを受け

てしまったのです。何をしていいのやらしばらくわからなくなる程のパニック状態に陥ってしまったのです。私のチェンジは完全ではなかったというところをつくづく思い知らされました。本来ならばすぐに確認の電話をするはずなのに、一週間以上も何もできず心を痛め、夜も寝ずに悩みました。

翌年の九月の二十六日に孫が生まれました。私と主人は夏の休暇をアメリカで過ごし、前日の二十五日、つまり生まれる前日にアメリカを発ったので、帰国六時間後に誕生の連絡を受けました。私は本当はアメリカに残るべきだということは充分過ぎる位分かっていたのですが、出産に付き添う勇気がどうしても出なかったのです。まだまだ自分の中に子供たちの結婚に対するこだわりのようなものが残っていたからでしょう。

翌年春、息子夫婦が孫を連れて日本に来ました。空港で待っている間に感じていた違和感のようなものが、初孫の顔を見た途端にスッと消え去り、心に平安を感じました。それから三週間の日々を家族水いらずで本当に楽しく過ごすことができました。娘にもいずれ子供ができることでしょう。その時には本当に心から愛せるように、これからも静かな時間を持ち、心の声を聞き、日々チェンジしていきたいと思っています。私が悩んでいた時に励まして下さったM R Aの友人の方々にこの場

をお借りして改めて感謝申し上げます。現在、習志野市の国際交流協会や教会の婦人部に所属して、在日外国人や留学生のお世話をさせて頂いてますが、アメリカでの決心を忘れることなく、そして様々な方々との出逢いを大切にしながら、これからも続けていきたいと願っています。

(主婦 千葉県習志野市在住)

(注) 客家

北方の漢民族が、歴代の中原一帯の戦乱を避けて集団で南下した人々。世界中に四千五百万人いるといわれる。団結心が強く、進取の気風に富む。文化、伝統保持と教育を重んじ、政治への高い指向性がある。女性に極めて勤勉であり、纏足を拒否した。朱子、王陽明、孫文、鄧小平、李鵬、李登輝、リークアンユーも客家。

(講談社新書「客家」より)

平成二年の秋、私は神戸で開かれた第十三回MRA関西秋期大会に参加しました。そこで、マレーシアの高校の先生で千葉大学に留学中だったプシユパ・パナダムさんと、たまたまプシユパさんを訪ねて来日されていたお母さんのスンドランバルさんに出会いました。その時、皆の前でお母さんが話されたことに私は強く心を打たれ、忘れることが出来ません。



私たちの世代が 伝えなければならないこと

宮崎美江子
みやざき み え こ

第二次世界大戦の頃、お母さんは六歳の幼女でした。侵攻してきた日本の兵隊が、乱暴したり、残虐な行為をしたりするのを目の当たりにして、その恐ろしさが心に焼き付き、日本人に対して心を閉ざしてしまわれたそうです。それ以来長い間、どうしても日本人が好きになれなかったと、正直に淡々と話されました。それから五十年近く経ち、プシユパさんが留学生として日本で勉強するようになり、勧められてやっと日本に来る気になったと言われました。私はその言葉を聞いている内に胸が痛くなり、涙が溢れてきました。そして、どうしても謝らずにはいられない気持ちになり、彼女の傍らに駆け寄り、「ごめんなさい」と、心からお詫びしました。すると、彼女は静かにこう言われました。

「それはもう済んだことです。日本人皆が悪いのではなく、命令してさせた人が悪いのです」

と微笑まれた時、私は恥ずかしさと申し訳なさで胸が一杯になりました。

戦争の頃、私は二歳と四歳の幼児二人と赤ん坊を抱え、食物もミルクも少なく、苦勞していました。空襲警報の度、寒い夜でも防空壕に入り、とうとう神戸の上空襲では戦災に遭い、苦しいことが続いていました。それで自分たちは、戦争の被害

者だと思ひ込んでいました。

でも、戦場になった南方の国々や大陸では、幼い子供たちが、人間不信になり心を閉ざすほど、辛い恐ろしいことがあったのだと知りました。私たち日本人が、心から詫びなければならぬことがあることが分かりました。

私たちは、戦争の非情さ、酷さを、戦争を知らない世代に、はっきり正しく伝えなければいけないと思いました。

湾岸戦争が始まって、生々しいニュースが連日伝わってきていた頃のことです。ある週刊誌の表紙で、かわいい幼い女の子が人形の手を握りしめ、悲しそうな顔で一人で歩いている写真を見た時、私はハッとしました。

泣きじゃくっているようなその顔と、五十年前のスンドランバルさんの顔とがオーバーラップして、胸に突き刺さるような痛みを感じました。湾岸戦争でも、平和な家庭が壊され、幼い子が恐ろしい悲惨な出来事に、人間不信に追い込まれ、心を閉ざしてしまっているのではないのでしょうか。それは子供たちの将来のために、悲しく不幸なことだと思いました。

湾岸戦争が終わった時、そうした子供たちに、一日も早く笑顔が戻り、愛に深く

包まれた温かな日々が来ることを祈らずにいられませんでした。そして、私にそれを気付かせて下さったスンドランバルさんと、その場を与えて下さったMRAに、私は心から感謝しています。

世界の平和のために、私たち一人ひとりが、先ず周りのアジアの国々の同世代の人たちと、お互いに戦争の痛みや非情さを心を開いて語り合う場が欲しいと思います。二十一世紀を担う今の子供たちが、国境を越えて温かく思いやれる心豊かな人に育つためにも、私たちの世代の役目は大きいと思います。

今、何をなすべきか、静かに心の声を聞きながら、MRAの場で、これからも勉強させて頂きたいと願っております。

(主婦 兵庫県神戸市在住)

私の経歴は多岐多様にわたっていますが、今思えばどれもお恥ずかしいことばかりでした。その恥ずかしいことをしていた私の目を初めて開いて下さったのが、MRAの創始者フランク・ブックマン博士でした。戦後間もなく、相馬雪香さんのご紹介で、アメリカのミシガン州マキノ島にあったMRAセンターに招かれ、博士にお会いしました。



あなたは「自由」ということを
知っていますか？

加藤シズエ
かとう

その当時は日本も貧乏で外貨も手に入りませんし、外国へ出かけるなどというのは特別中の特別のことでした。

戦後、婦人代議士第一期生として、三十九名の女性代議士が誕生しました。それまで、参政権すら与えられず抑圧されていた日本人の女性が、参政権を得たとたんに、衆議院議員でございまして三十九人も白亜の殿堂に登ってきました。

その一人であった私は、自分もしかしたらよっぽど偉い人間かしらなどと考えていました。あの赤い絨毯じゅうたんを踏んでしまうと、誰でも自分が偉くなったと思い違いをしてしまうんです。ことに議員を長い間やっているところに思い違いをすることが多く、私などそのいい例でした。それに私は欧米もたびたび旅行しているし、英語にも通じているんだから、アメリカに招かれるのは当然のことくらいに思っていました。

国際会議と聞かされていたので、さぞかし色々な国々の代表が参加していて、世界の情勢を知るいい機会と思って行ってみると、たしかに白いのから黄色いの、黒いの、真っ黒いのまで沢山の人々が世界中から集まって連日会議を開いていました。

どんなにか珍しく素晴らしい話が聞けるのか、そして沢山の知識を吸収してより利口になれるのかとワクワクしていたのです。

ところがおとなしく聞いていると、顔の色こそ違えて来る人出て来る人、言うことは皆似たり寄ったりでつまらない話ばかりしているんです。自分はいつどんなふうにも不正直でこんなウソをついたとか、家内にこんな秘密を持っていたとか、自分がどんなにつまらない人間であったかやっと分かっただとか、一体何を言っているのかと思いました。立派な方々がわざわざ海を渡ってここまで来て、家内に隠しごととしてましたなんていうつまらない話ばかりして、それをまた聞いている人も聞いている人だし、こんな会議を主催する人もどうかしていると思いました。星島二郎（注3）先生ご夫妻と一緒にしたので、ご夫人とよく、「この会議って一体何を話すところなんでしょうね。二言目にはチェンジ、チェンジ。一体チェンジって何なんでしょう。あの言葉を聞くとゾツとしますね」と話して、一刻も早く逃げ出そうなどということばかり考えていました。

そうしているうちにブックマン博士に直接お会いする機会があったので、ちょうど持っていた聖書の裏表紙に何か記念になる言葉を書いて下さいとお願いしたら、

それでは暫く預かっておきましようと言われました。数日後に戻ってきた聖書には、「あなたは自由ということを知っていますか？　この聖書をよく読んで自由の身になりなさい」と書いてありました。

日本の女性はどう自由の身になったというのに人を馬鹿にするのも程があると思いました。ましてや国会議員の私が、自分を自由の身でないなどと思っているわけがありません。博士の言われる自由という言葉の意味がどうしても理解できませんでした。

ブックマン博士は普段はとぼけたような顔をした方ですが、他人の心の中が見える素晴らしい、そして恐ろしい目を持っていらつしやいました。博士は、この大変傲慢な女は何か心縛られていて自由でないと考えられてその言葉を書いて下さったらしいのです。

さて、国際会議も終わりほとんどの参加者は帰ったのですが、ごく少数の人たちが残され、私もその中の一人でした。トレーニングを施せば、将来ちよつとは社会のお役に立てるだろうという人間が残されたと聞きました。

マキノ島の教会で静かな会合が開かれました。そこにフランスのイレヌ・ロー

(注4)さんというご婦人がいたのですが、その方はフランス社会党の婦人部長という立派な経歴を持った方で、社会運動の指導者として大変な雄弁家でもありました。パリがヒトラーに占領されていた時に、息子がナチスに拷問を受けたり色々ひどい目にあいながら耐えて来た彼女にとって、ドイツという国、そしてドイツ人は絶対に許せない存在でした。ドイツのことを考えると、心が憎しみで燃え上がるような思いがしたそうです。祖国を蹂躪じゅうりんされ息子を目の前で拷問されどうして許せるでしょうか。

ブクマン博士が彼女に、「これからのヨーロッパ、そして世界の平和を求めるならばフランスはドイツと握手しなければならぬ」と言うと、「自分たちがドイツのためにどんなにかひどい目にあったのかも知りもしないくせに、いまさら握手をしろなどとこんなことを言うのがMRAならば自分はもう帰る」と言つて帰ろうとしたというとても気の強い女性です。

しかし、ドイツを抜きにしてヨーロッパの再建を考えることができるのかというブクマン博士の言葉がどうしても心を離れず、とうとうドイツ人を許したのでした。このような草の根のチェンジというものが、その後の独仏間の和解につながつていき、今日のヨーロッパの繁栄の基礎としてあるのです。

そのイレース・ローご夫妻が演壇に立つて、静かに語り始めました。元海軍の軍人だったというご主人は、「女房が生意気で、いつも指導者ぶっているのが気に入らなかったが、よく考えてみたら妻は本当に正しい仕事をしているのだという事に氣付き、嫉みや憎しみの感情を抱いていたことを妻に謝罪した」と話すと、イレース・ローさんが、「夫は凡人でただ黙々と働くしか能のないつまらない男だと考えていた。しかし、M R Aを知ってから、人をそんなふうに見下すのは間違いだということを教えられた。夫に対して大変傲慢な態度を取っていたことを反省し夫に謝つてからは、本当に信頼、尊敬しあえるような夫婦になれた」と応えました。

私は、その心からほとばしるようなお話を聞いて初めて、「心の声」というものを知りました。

たいがいの人は、「自分は盗みを働いたこともないし、殺人を犯したわけでもない。真つすぐな道を歩いて、税金もちやんと払って暮らしている。家庭でも自分の仕事はキチンとやっている。そんな自分のどこが悪いのか」と言われます。私もあらゆる艱難辛苦かんなんしんくをくぐり抜けて一生懸命ここまでやってきて、二人の息子も立派に育つてたし、加藤勘十（注5）という労働運動の指導者と結婚してからは、夫も大切に

したつもりでしたが、家庭内に困った問題を抱えていたんです。

それは私の義理の娘、つまり加藤の先妻の娘のことでした。十三才で母と死別した娘は、父が新しい母を迎えるというので大変に喜んでいたわけです。ところがその母たるや、それはこの私ですが、傲慢な女だったんです。

母性愛というものは本能的な愛情であって、自分で生んだ子供であれば他人から言われなくても愛情が湧き出す、それが子供を育て愛する母性愛というものなんです。

そういうプロセスを経ないでいきなり母という立場に立つても自分のお腹を痛めて生んだ子供と同じように愛情を注ぐなんてことはできないのが当たり前なんです。ではどうしたらよいのか。

私は、「母」という立場で、教育や躾とか色々面倒を見て、母親としての責任を充分に果たせばいいのではないか。でも本能的な愛情を生みの子と同じようにその娘に注ぐのは無理だ」などと勝手に考えて、それが絶対に正しいと思っていたんです。

それで迷惑したのが娘です。

新しいお母さんがどんなにか可愛がってくれるのかと期待していたら、少しも可

愛がつてくれず、驕のことばかり話している困ったお母さんだったんです。

お母さんの方は自分が偉いつもりですから、娘のそんな気持にはちつとも気が付かず、この娘は本当に野放しで育ってしまったから、あれもこれも教え込まなければなんてことばかり考えていたのですが、やはり十三才かそこの娘の求めていたのは愛情でした。私はその愛情を注がなかった女です。

そんな親子の気持のずれが段々と大きくなり、とうとう娘が家を出るという大変に不幸な事態になったのは次のような経緯からでした。

ちょうどマッカーサー司令部が東京にできた頃、司令部のジープに乗った将校が私の家に来て、「マッカーサー司令部は、戦争に反対して軍部と闘い多大な犠牲を払ったあなたのご主人加藤勘十さんを非公式な顧問として迎え、日本がこれから本当に民主主義になるために労働問題をどうするかということについて色々のご意見を伺いたい。また、あなたも戦争に絶対反対した人だから、国防婦人会と愛国婦人会しかなかった日本に、本当に自主的な婦人組織をどうやって作るかということについて意見を聞きたい」と言いました。

これは有り難いことだと、それに少しばかり英語も話せたもので、偉そうな顔を

して司令部に出入りして、お役に立っているつもりでやってみました。

そんなわけで、ジープが家に来るとか制服のアメリカ軍人が来るということが、娘の目にはとてもなく大変なことに映ったらしいのです。年端もいかない娘でも、これからは国際的にならなくてはいけない時代になったんだなと考えたらしく、沢山いた若いG Iの一人と国際交際を始めたというわけです。

ある晩、私が遅く帰宅すると、応接間の灯りがこうこうとついていました。お客様かなと思つて覗いてみると、娘がG Iを部屋に招き入れていたんです。

私は本当にびっくりしました。良家の娘が親の知らない男と交際するなんてとてもないことで、私はもうかんに怒りまして、娘を叱り飛ばし、そのG Iにも「あなたは親に断らないでなぜ家にズカズカと上がったのか。あなたの名前と上司の名前をここに書きなさい。こんなことは二度と許さないからこの家には来るな！」と、厳しい態度でそのG Iを追いつ出し、すぐ上司に「あなたのところのG Iが娘を誘惑しに來たのでえらく迷惑している。あんなG Iはどこか遠くへ飛ばしてくれ」と手紙を書きました。そのG Iは可愛想に青森あたりに飛ばされたそうです。

私は胸がスーッとして、母親として立派にやったなんて思っていたんですが、娘はすっかり心を痛めてしまい、こんな厳しい母と一緒にいたのではとてもたまらんと思ったのか、ついに家を出てしまったのです。私は国会議員として、自分の家庭でそんな他人に聞かれたらまずいような話があるのは非常に困ったことだとは思いましたが、自分は母親としてやるべきことをやったんで、やっぱり家を出ていった娘の方が悪いんだと考えていました。

それがマキノ島で、「なるほどこれが人の本当の心の中から出て来る声なのか。その心の中から出て来る声と自分が頭の中で色々とでっち上げた知恵によって作り上げた声とは全然別のものだ」と気付きました。

娘がそのそばにいられないような厳しい母親であったことに遅まきながら気が付いたのです。

もしこれが、どこかの誰かから頭ごなしに「あんたのやったことは間違っている」などと言われたのだったら、私はどこまでも反抗したでしょう。

ところがマキノ島では、「良心の声を聞けば、本当に素直になれる。そしてもし、何か改めなければならぬことがあれば即座にそれを改めて、気持の上で生まれ変わる。そうすることによって心のあらゆる束縛から自由になれる」と色々な方が言

われました。

ブックマン博士が言われた「自由になる道」とはこういうことなのかと思いました。そこで私も教会の演壇に立ち、「実は私も故国に残した家族との間にこのような問題を抱え、自分の至らなさには少しも気付かず、相手だけが悪いんだという立場を今日に至るまで取っておりまして。これは大変不遜なふそんことであり、大きな間違いであつたことに気付きましたから私はこれをチェンジします」と言いました。

あれほど嫌だった、身震いするほど嫌だったチェンジをとうとうしてしまつたのです。

偉そうな顔をしていた婦人議員ともあろうものが、「私は本当に至らない人間でした。心を改めて新しい人間として立ち直りたいと思います」と、本当の心の声を人様の前で披瀝する、それは大きな勇気のいることであり、同時に恥ずかしいことでもあります。涙がぼろぼろと出てきたんです。

そうしたら、そこにいた皆さんも、あの傲慢な女性がよくあそこまでしおらしく自分の非を改めたものだと思つて下さったのか、私が涙をこぼすと同時に泣いて下さいました。

あれが私の人生のお葬式の日だったんです。

マキノ島の小さな教会で、私は過去の私にお葬式を出しました。

このような体験を色々な方が、世界中でやっておられます。仏教で言えば目の鱗が落ちるとでも言うのでしょうか。心の中の間違いを勇氣をもつて正直に認めるということは、自分は別な人間になるという決意をしたということです。そのような瞬間を持てるのがMRAの本当の真価なんです。

MRAは、ああしなさい、こうしなさいなどとは言いません。ただ、そのような心情に到達するにはどうしたらいいかということを「絶対正直」、「絶対純潔」、「絶対無私」、「絶対愛」という四つの絶対道徳標準というものを掲げて示しています。

この「絶対」が厄介なんです。

この絶対が付いていなければと言う人がよくいますが、ブックマン博士はこう言っておられます。「電球をつける時、スイッチを八分通り回してつきますか？ 最後まで回して初めて明かりがつくでしょう。人間の心も八分じゃ駄目、絶対は絶対です。少しばかり正直で少しばかり嘘をつくというんじや駄目なんです」。

日本語で道徳というとなんて随分難しく聞こえますが、そのあたりは自分で上手に解釈すればいいんです。ただ、絶対を否定してしまうと、せっかくそこまでチャレンジした値打ちがなくなってしまうんです。

四つの基準とは神様であり仏様なんです。

私は毎朝その基準に心を照らしながら、心の糧になるような本を三冊用意してありますので、それを必ず読むことにしています。その一冊である「A New Day」という本には、旧約聖書や新約聖書の言葉、あるいは宗教家や労働指導者たちの残した名言が書いてあります。真理を追求して止まなかった人々の考え方、生涯というものがとても参考になります。朝の十五分間もあればいいんです。そうして心を掃除してから一日をスタートするんです。そういう生き方をすると日々の出来事に素直に感動できるようになります。

細かく心を配るということがMRAの値打ちなんで、MRAというのは心の隅々に温かい血を通わすということです。私はMRAで心をきれいにして毎日意義のある生き方をさせて頂いております。皆様もどうぞお試し下さい。

(日本家族計画連盟会長 東京都目黒区在住)

(注3) 星島二郎

明治二十年、岡山県生まれ。東京帝国大学卒業後、犬養木堂の秘書を務め、政治を学ぶ。後に弁護士となり、片山哲元首相と東京に法律事務所を開設。大正九年、三十二才で岡山二区から初当選以来、昭和三十三年の第三十回総選挙まで十七回の連続当選を果たし、「憲政の神様」尾崎行雄の二十五回連続当選に次ぐ記録を作った。その間、商工相、国務相、衆議院議長、サンフランシスコ講和条約の全権委員などを務めた。昭和二十二年、フィリピンのバギオ市で開かれたMRA大会で、同行の加藤シヅエ氏らと日本の朝鮮統治時代の圧政を謝罪した上で、尹民議院外務委員長ら韓国側代表と連日会議を行ない、これが後の日韓正常化の礎となった。又、統治時代に日本に持ち込まれた文化財返還運動にも携わり、自ら李王朝所有の狍犬等を返還して範を示した。昭和五十五年、九十二歳で没す。

(注4) イレーヌ・ロー

一八九八年生まれ。第二次大戦中、反ナチ抵抗運動に加わり医療班を組織して闘った。三男をゲシュタポに拷問され、フランス人として、又、母親としてドイツ人を心から憎んだ。戦後間もない一九四七年、スイスのコーのMRA世界会議場マウンテンハウスで開かれたMRA世界大会に参加したがドイツ人たちの姿を見て直ちに帰ろうとした。しかし、ブックマン博士に、「ドイツ人を除外してどうやってヨーロッパの融合と再建が出来るのか」と説得され、三日三晩寝ずに悩んだ末、ついにドイツ人を許し、彼らに対する憎しみを謝罪した。その後、仏独友好の回復に尽力し、後のEC設立の礎となった。マルセー

ユ選出の国会議員、社会党中央執行委員等も務め、融和のメッセージを携えて世界各国を訪問した。一九八七年、八十八歳で没す。

(注5) 加藤勘十

明治二十五年、愛知県生まれ。日本大学法科中退後、東京毎日新聞社入社。昭和十一年、第十九回総選挙で東京五区より立候補し、全国最高点にて当選する。昭和十九年、石本シヅエと結婚する。昭和二十年、日本社会党結成に参加し、同時に中央執行委員となる。昭和二十三年、芦田内閣の労働大臣就任。昭和二十七年、MRAの招待により渡米。昭和三十年、MRA国際親善使節団に加わって、台湾、フィリピン、タイ、ビルマを歴訪。マニラ市内の大学の講堂で、千数百人の聴衆の激しい野次を浴びながらも、新しい日本が目指そうとしている道義立国への道々を割れ鐘のような声で訴え、過去の行いを謝罪した。とたんに会場は水を打ったように静まり、次の瞬間、万雷の拍手が堂を揺すった。戦後の日本と東南アジアの和解の礎が築かれたひとこまである。昭和四十四年、衆議院議員を辞し、後進に道を譲る。翌年、勲一等瑞宝章を授けられる。昭和五十三年、八十六才にて没す。

=MRAとは=

世界が手を携えて共に生きる新しい時代を迎えるために、人種、宗教、階級、体制の違いを越えた人類共通の価値基準（ものさし）が求められています。MRA（Moral Re-Armament、道徳再武装）は、第二次大戦を目前にした昭和13年（1938年）に、軍拡競争に明け暮れる世界を「軍備ではなく道義と精神の力によって再武装」することが世界平和の道である、とするフランク・ブックマン博士の警告から始まりました。これはワシントンの軍縮会議を傍聴した博士の「どんな立派な和平プランも、人の心や姿勢を変えない限り無意味である。対立する相手や国を変えるには、先ず自分、そして自分の国が変わることである」という理念に基づいたものです。以後MRAは、あらゆる民族や宗教や文化にも共通しているモラル（心）を基盤とした、相互信頼作りや問題解決の橋渡しを世界的なスケールで進めてきました。今日のEC誕生の前提となったドイツとフランスの和解、黒人多数派と白人少数派の和解によるジンバブエの無血独立、レバノンのキリスト教徒とイスラム教徒との対話、カンボジア、エルサルバドル等における紛争当事者同士の対話の橋渡し等に貢献してきました。

日本においては、1977年より毎年、各国から代表を招いてMRA日本キャンペーンを開催しています。また、スイス、コーのMRA世界会議場マウンテンハウスで開かれるMRA世界大会（毎年7～8月）や、各国のMRA国際会議へ代表を派遣したり、イギリス、オーストラリア、インドなどのMRAセンターにMRA海外研修生を派遣し、国際事情や異文化への理解を深め、世界に貢献できるような日本人の養成に努めています。お問い合わせは、社団法人国際MRA日本協会事務局（電話03-3821-3737）へどうぞ。



社団法人 国際MRA日本協会

〒113 東京都文京区千駄木 4-13-4

TEL:03(3821)3737 FAX:03(3821)6479

発行 平成 5 年 1 月 31 日

頒価 450円